

「見二菟原処女墓一歌」考

安井 絢子

一 はじめに

見二菟原処女墓一歌一首并短歌
 菟屋之 菟名負処女之 八年児之 片生乃時從 小放尔 髪
 多麻豆尔 並居 家尔毛不所見 虛木綿乃 牢而座在者
 見而師香跡 悵憤時之 垣廬成 人之詭時 智弩壮士 宇奈比
 壮士乃 廬八燎 須酒師競 相結婚 為家類時者 焼大刀乃
 手類押捺利 白檀弓 駁取負而 入水 火尔毛將 入跡 立ち
 向二競時尔 吾妹子之 母尔 語久 倭文手纏 賤吾之故
 大夫之 荒争見者 雖レ生 應レ合有哉 穴串呂 黄泉尔將レ待
 跡 隨沼乃 下延置而 打歎 妹之去者 血沼壮士 其夜夢
 見 取次寸 追去祁礼婆 後有 菟原壮士伊 仰天 叫於良
 妣 跟地 牙喫建怒而 如已男尔 負而者不有跡 懸佩之
 小 劍取佩 冬寂預都良 尋去祁礼婆 親族共 射婦集 永
 代尔 標將レ為跡 遇代尔 語將レ継常 処女墓 中尔 造置
 壮士墓 此方彼方二 造置有 故縁聞而 雖レ不知 新喪之
 如毛 哭泣鶴鴨

(9・一八〇九 挽歌)

反歌

菟屋之 宇奈比処女之 奥柳乎 往来跡見者 哭耳之所レ泣
 墓上之 木枝靡有 如レ聞 陳努壮士尔之 依家良信母
 (9・一八一〇 挽歌)

右五首高橋連虫麻呂之歌集中出

(9・一八一 挽歌)

高橋虫麻呂之歌集中出の右の歌群は『萬葉集』巻九挽歌部に載る。二人の男に求婚された女が自死し、残された二人の男が続いて死に至った事情が描かれる長歌は、三者の墓が造営されたその事情を「故縁聞きて」と受け、眼前の墓の状況への感慨を吐露する構成をもつ。続く反歌二首には女の墓への感慨が吐露される。長歌において、作歌者とは直接ゆかりのない二人の男と女の死に関わる事情を詳細に描写する当該歌群は、挽歌部に載るものの、現在、伝説歌とも把握される。

長歌には、菟原処女(女)が人目に付くことなく成長し、多くの人が言い寄るようになった時に、千沼壮士と菟原壮士という二人の男から求婚され、選ぶことができずに亡くなり、そのことを夢に見

た千沼壮士が先に後を追ひ、菟原壮士もまた捜して行ったため、親族が墓を造営したという墓の造営の「故縁」が詠まれる。集中の歌の中で「故縁」ということは当該歌にのみ見える。「故縁」に対する感慨を詠む当該歌は、現在あるいは現実にあつたこととして、経験された死を対象とする他の多くの挽歌とは質の異なる対象に対する感慨が主眼となっている。では、歌中の主体「我」は、「故縁」と眼前の墓との関係性を、どのように把握し、表現しているのだろうか。当該歌における「故縁」への感慨に着目し、挽歌でありつつ、伝説歌とも把握される当該歌の質について考察したい。

二 「新喪のごとも 音泣きつるかも」

当該歌群の長歌末尾において感慨は「新喪のごとも 音泣きつるかも」と詠まれる。「にひ（新）」は形状言で、「喪」を修飾して、新たに亡くなった人に対する喪を意味する。「も（喪）」は、「人の死後その親族が屋内に憂いに沈んで謹慎していること」（時代別国語大辞典 上代編）とされる。ここに、「新喪のごとも」とあることは、事実としては「新喪」ではないという把握が根底にあることを示している。なぜ「新喪のごとも 音泣きつるかも」（哭泣鶴鴨）と詠むのであろうか。

「音泣く」ということは、集中に当該の一例しか見られないが、「音泣く」という表現は虫麻呂以前の挽歌において、次の五例が見られる。

a やすみし わご大君の 恐きや 御陵仕ふる 山科の 鏡
の山に 夜はも 夜のごごと 昼はも 日のごごと 音
のみを（哭耳呼） 泣きつつありてや（泣乍在而哉） ももし

きの 大宮人は 行き別れなむ

（2・一五五 挽歌 額田王）

b …もみち葉の 過ぎて去にきと 玉梓の 使ひの言へば…
づくにか 君がまさむと 天雲の 行きのまにまに 射ゆ鹿
の 行きも死なむと 思へども 道の知らねば ひとり居て
君に恋ふるに 音のみし泣かゆ（哭耳思所泣）

（13・三三四 挽歌）

c …春野焼く 野火と見るまで 燃ゆる火を 何かと問へば…
立ち留まり 我に語らく なにしかも もとなとぶらふ 聞
けば 音のみし泣かゆ（泣耳師所哭） 語れば 心そ痛き
天皇の 神の皇子の 出でましの 手火の光そ そこば照り
たる

（2・二三〇 挽歌 笠金村歌集）

d 君に恋ひいたもすべなみ葦鶴の音のみし泣かゆ（哭耳所泣）

朝夕にして （3・四五六 挽歌 余明軍）

e みどり子の這ひたもとほり（匍匐多毛登保里） 朝夕に音のみ
そ我が泣く（哭耳曾 吾泣） 君なしにして

右五首、資人余明軍不_レ勝_二犬馬之慕_一、心中感緒作歌。

（3・四五八 挽歌 余明軍）

a は、天智天皇の崩御後、「御陵仕ふる」場で、昼夜を問わずに
「音泣く」と詠む。「御陵仕ふる」は、陵を造営建設中の意とされ、
埋葬する以前においてその死を悼む際の表現と理解できる。b は、
使者から夫君の死を告げられるものの、行方を追うこともできず、
一人居るしかない状況で「音泣く」と詠む。c は笠金村歌集中出
の歌である。志貴皇子の葬列の送り火に出会い、その送る人が嘆き
を「音泣かゆ」と告げる。a～c の「音泣く」は、いずれも死

に向き合わざるを得ない状況での嘆きの表現であり、それは「すべなみ」と詠むdや「すべなし」の状況をみどり子にたとえるeにも共通する。

d・eは、「天平三年辛未秋七月、大納言大伴卿薨之時歌六首」(3・四五四・四五九)中の歌であり、eの左注から、主人であった大伴旅人を喪った直後の余明軍の作歌であることが知られる。注意されるのが、eの「みどり子の這ひたもとほり」の「這ひ」が「匍匐」と表記され、その「匍匐」とともに「音::泣く(哭::泣)」ことが詠まれている点である。「匍匐」は、伊耶那美神が亡くなった直後、伊耶那岐命がその死を嘆き悲しむ場面で「乃匍匐御枕方、匍匐御足方而哭時」(神代記)と見える。この匍匐や哭泣を、和田萃氏は殯における儀礼であるとする。氏は殯について、一般には死者の甦りを願う十余日ほどの期間であり、殯庭では、声を立てて泣く儀礼(発哀・発哭・挙哀)が行われ、声を立てて号泣慟哭し、その泣くには特に哭の字があてられたと指摘している。eの「這ひ」に「匍匐」の文字が当てられていることは、「音::泣く」という表現が殯における再生儀礼の場の泣き方を想起させる表現であることを考えさせる。

殯は、孝徳紀大化二(六四六)年三月条に「凡王以下及至庶民、^二不得^レ營^レ殯^一」とあることから、次第に形骸化していったことが知られ、『続日本紀』慶雲四(七〇七)年六月条に「供^二奉^レ殯宮事^一」と記される文武天皇の殯を最後に、主要な記録上には見られない。当該歌群の作歌者と推測される高橋虫麻呂は第三期(七〇一・七三三)に活躍した歌人である。虫麻呂の当時には、殯は一般的には行われなくなっていたと考えられるが、殯における儀礼の記憶

は残っていたであろう。当該歌群の長歌末尾の感慨は「新喪」ではないにも関わらず、まさに死に直面した服喪の期間のように泣くと詠む。更に「音泣きつるかも」の「音泣く」は「哭泣」と表記されている。死に直面した新しい服喪の期間のように泣くとして、殯における再生儀礼の方法であった「哭泣」と同じ表記を用いていることには、再生儀礼の記憶を想起させる意図があるように考えられる。では、そのように泣くとする「我」の感慨は、「故縁」の何によるのであろうか。

三 「故縁聞きて 知らねども 新喪のいづく 音泣きつるかも」

長歌において、感慨は、眼前の墓の状況を見、造り置いた「ゆゑよし(故縁)」を聞いたことよって詠まれる。『上代編』は、「ゆゑよし」を、わけ。いわれ。由緒の意とし、当該例の他、卷十六の標目として「有由縁并雑歌」とある「由縁」をその例として挙げる。内田賢徳氏は、諸例の検討から、「有由縁并雑歌」の「有由縁」は、「わけあり、云わくありの、という意味である」とする。⁴⁾芳賀紀雄氏は、「由縁」が、漢籍中において事の由来・事情を叙べる文脈中に用いられることを指摘し、「歌に即して、その歌にまつわる「由縁」を説くかたちが萬葉集卷十六には見えるわけだが、それは取りも直さず、歌自体が「由縁」を有する、すくなくとも説くべき「由縁」を歌が有していることになる」と述べている。⁵⁾

当該歌の「故縁聞きて」を「萬葉代匠記」(精撰本)は「由緒ヲ聞テ」とする。「故」は『淮南子』(汜論訓)「勸問其故」の高誘注に「故、意也」と見え、理由或いはわけの意味と考えられる。「故

縁」は「由縁」と類義と考えられるが、卷十六の「有由縁」がその歌にまつわる「由縁」を説くのに対して、当該歌では歌にまつわるものではなく、三者の墓をその形にした理由、すなわち墓にまつわる逸話を聞くのである。当該歌においては、親族が三つの墓を並べて造営した事情をうけ、「ゆゑよし（故縁）聞きて」と詠まれる。処女墓の両隣に壮士墓が在る墓の有り様が説くべき事情を有し、その「故縁」に対して感慨が詠まれていると理解することができる。

長歌には、「故縁」として、菟原処女に多くの人が求婚した際に、菟原壮士と千沼壮士という二人の男が激しく妻争いをしたことが語られる。壮士の名の「千沼」と「菟原」は地名と考えられる。前者は、和泉国の古名で、現在の大阪府の堺市から岸和田市の辺りの海岸沿いの一帯に比定され、後者は、摂津国の旧郡名であり、現在の兵庫県芦屋市から神戸市東部にかけての一帯に比定される。名の共通性から、菟原壮士と菟原処女とは同郷の男女であり、千沼壮士は異郷の男であったと推測される。つまり、同郷の男である菟原壮士と異郷の男である千沼壮士が菟原処女を巡って激しく争ったのである。

二人の男に争われた菟原処女の思慕する相手については、反歌第二首に「聞きしごと千沼壮士にし依りにけらし」とあり、千沼壮士を思っていたことが知られる。にも関わらず、処女が千沼壮士を選ばないのは何故か。この背景に透けて見えるのは異郷の者との婚姻を避けたいとする共同体の意識ではないか。『常陸国風土記』（香島郡）には、「那賀の寒田」と「海上の安是」という異なる郷の男女が歌姫において逢うが、その関係性の露見を恥じて松と化した逸話が、次のように描かれる。

以南、童子松原。古、有二年少童子^一。俗云^二加味乃乎止古・加味乃乎止売。男称^三那賀寒田之郎子^一、女号^二海上安是之嬢子^一。…同存^三望念^一、自愛心滅。月^レ経累^二日^一、歌姫之会^三邂逅相遇^一。…俄而鶏鳴狗吠、天曉日明。爰童子等、不^レ知^二所^レ為^一、遂愧^二人見^一、化^二成松樹^一。〔常陸国風土記〕香島郡

右の逸話からは、異なる郷に属している千沼壮士との関係は菟原処女と同郷の人々には受け入れられ難かったことが推測される。処女が母親に語ることばの後半部「生けりとも逢ふべくあれやししくしろ 黄泉に待たむ」には悲痛な心情の訴えを読み取るべきである。しかし、それに対する母親の応えは何もない。そこに処女の思いを遂げさせられない背景を母親も負っている事情が窺えよう。処女は自死する。

処女の死を受けて、千沼壮士は、「その夜夢に見 とりつつき追ひ去きければ」と、夢によって処女の死を知り、後を追ったことが詠まれる。〔後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈廻に標結へ我が背〕（2・一一五）に「追ひ及かむ」とあるように、「追ふ」という行動は、追う相手の行方を知っている故に可能になる。内田賢徳氏は、菟原処女が千沼壮士の夢に現れるということは、処女の意志が夢として伝えられたことを示すとする。氏は、「生けりとも逢ふべくあれやししくしろ 黄泉に待たむ」というそのメッセーが千沼壮士に向けられたとすると、「賤しき我」が千沼壮士にふさわしいということになってしまふことを指摘され、「相手をどちらかに特定せず、黄泉で待つて、後を追ってきた方と結ばれよう」と言っていると考えた方がよい」と述べている。処女が相手を特定せずに「黄泉に待たむ」と語るのは、「賤しき我」には自ら壮士を

選ぶ権利がないとの認識を考えさせる。千沼壮士は、夢に見た菟原処女への確信によって追ってゆくのであり、菟原処女に対する確かな愛情を読み取ることができる。

一方、菟原壮士は、「後れたる 菟原壮士い 天仰ぎ 叫びおら
び 地を踏み きかみたけびて もころ男に 負けてはあらじと
掛け佩きの 小大刀取り佩き ところづら 尋め行ければ」と詠
まれ、菟原処女への思いは一切語られない。「負けてはあらじ」に
表現されるように、菟原壮士にとっては、妻争いの勝敗が重要な
であり、武器を持って「尋め行く」相手は千沼壮士である。「とむ
(尋)」ということばは、捜して行く意であり、「尋」は「羽客今何在
空尋伊洛間」〔初学記〕「尋」李先生「不遇詩」と見え、欽明紀六
年一月条には「小兒忽亡、不知所_レ之。其夜大雪。天曉始求、
有_二虎連跡_一。臣乃帶_レ刀擐_レ甲、尋_至巖岫_一。」と見える。菟原壮士
が「尋め行く」とあることは、捜し行くことを示し、菟原処女らの
行方を知らないことを示唆する。千沼壮士と菟原壮士との争いは、
菟原処女の行方を夢に見て知った千沼壮士の勝利であった。後追
いで自死する菟原壮士にとって、他の共同体の男である千沼壮士に処
女を奪われることはあってはならないことであった。菟原の土地に
おける共同体に属する者としての立場故に、千沼壮士を追わねばな
らなかった悲劇性が窺える。

三者が亡くなった後、菟原の土地において「親族どち」は、三者
の墓を妻争いのままに造営し処女墓の両隣に壮士墓を設置した。こ
のことは、両親族の力関係を思わせる。それぞれの土地の人々
にとって、菟原壮士と千沼壮士は死後も同等の立場として把握されて
いることを示すからである。三者の墓が並んで在ることからすれば、

菟原の土地の人々にとって「故縁」は、異郷と同郷の男が一人の処
女を争い、どちらも選べずに自死した処女とそれを追って死んだ男
達の話として把握されていたのであろう。しかし、歌の内容は二人
の男の争いに対して、選べずに「黄泉に待たむ」と語って自死した
処女と、それを追っていった異郷の男と、異郷の男に処女を奪われ
まいとして、亡くなった同郷の男の話として構成されている。複雑
な感情のもつれから、三者が亡くなった悲劇譚として把握されてい
るのである。

注意されるのが、「故縁聞きて」に続き、「知らねども」とあるこ
とである。「知らねども」は、一般的に、実際には、処女等やその
事件を知らない意と解される。ただし、早く『萬葉集童蒙抄』が「聞
きて知らね共とは続かぬ句なり」と指摘するように、その理解には
疑問が残る。題詞に「菟原処女が墓を見る」、長歌に「故縁聞きて」
とあることから、処女等を実際に知らないことは明らかであり、ま
た、事件は聞いていて既知のことである。何を「知らね」とするの
かが問われよう。

当該歌群の作歌者と推測される高橋虫麻呂は、都人であり、菟原
処女墓が在る土地の人物ではない。歌中の主体「我」も「故縁聞き
て」と、墓のいわれを伝聞する立場にある。三人の墓の有り様を見
て、そのように墓を造った「故縁」を聞き、「新喪のごとも 音泣
きつるかも」と嘆くその間に「知らねども」がある。この文脈から、
事件とその土地の事情などを知らない意と考えられる。言い換える
と、その土地の人々が共同体の内部の男と外部の男が争うことを、
どのように把握し、「故縁」と妻争いそのままにある墓に対してど
のような感慨をもつのかは知らないという意であらう。「知らねど

も」とあることは、菟原処女墓がある土地とは無関係の立場にある「我」が妻争いそのままの様相を示す墓を見た時の感動の中心は、土地の人々とは異なるところにあったことを推測させる。その感慨は、長歌末尾に「新喪のごとも 音泣きつるかも」と、再生儀礼の記憶に繋がる泣き方で泣くと詠まれたことを受ける反歌二首において明らかにする。

四 反歌二首

反歌第一首の「奥つ城を行き来と見れば」は、従来、『萬葉代匠記』（精撰本）に「往来二見ルナリ」とあるように、「我」が奥つ城を往来した際に見ることであると解されてきた。『萬葉集全註釈』は、「あさもよし紀人ともしも真土山行き来と見らむ（往来跡見良武）紀人ともしも」（1・五五）の例を挙げ、『萬葉代匠記』同様「往復の度に見れば」の意とする。しかし、五五番歌の場合、助詞の「を」は用いられず、見る対象を明示してはいない。一方、当該歌は「を」と見る」という形式をもつ。「奥つ城を（奥柳乎）行き来と見れば（往来跡見者）」において助詞の「を」と「と」は、仮名書きであり、諸本に異同はない。当該歌群の助詞は仮名書きされる傾向にあるが、「土を踏み（跣地）」のように表記されない場合もある。ここに「を」と「と」がいずれも仮名書きされていることは、「を」と見る」という形式で理解されなければならないことを示しているよう。

助詞の「を」と「と」が仮名書きされ、「を」と見る」という形式が明らかな高橋虫麻呂以前の例は次のa～fの六首である。

a 青旗の木幡の上を（木旗能上乎）通ふとは（賀欲布跡羽）目

には見れども直に逢はぬかも（2・一四八 挽歌 倭大后）
b 石見の海 角の浦廻を（角乃浦廻乎）浦なしと（浦無等）
人こそ見らめ 渇なしと（渇無等）（一に云ふ「磯なしと（磯無登）」）人こそ見らめ よしゑやし 浦はなくとも よしゑやし 渇は（一に云ふ「磯は」）なくとも いさなとり 海辺をさして きたたつの 荒磯の上に か青く生ふる 玉藻 沖つ藻 朝はふる 風こそ寄せめ 夕はふる 波こそ来寄れ 波のむた か寄りかく寄る 玉藻なす 寄り寝し妹を：：（2・一三一 「石見相聞歌」 柿本人麻呂）

c うつそみの人なる我や明日よりは二上山を（二上山乎）弟と我が見む（弟世登吾将見）（2・一六五 挽歌 大伯皇女）
d 荒たへの藤江の浦にすずき釣る海人とか見らむ（白水郎跡香将見）旅行く我を（旅去吾乎）（3・二五二、雑歌 人麻呂、15・三六〇五）

e 梓弓 手に取り持ちて ますらをの さつ矢手挟み 立ち向かふ 高田山に 春野焼く 野火と見るまで（野火登見左右）燃ゆる火を（燎火乎）何かと問へば：：（2・二三〇 「志貴皇子挽歌」 笠金村）

f 鶏が鳴く 東の国に 高山は さはにあれども 二神の 貴き山の 並み立ちの 見が欲し山と 神代より 人の言ひ継ぎ 国見する 筑波の山を（筑羽乃山矣） 冬ごもり 時じき時と（時敷時跡） 見ずて行かば まして恋しみ 雪消する 山道すらを なづみぞ我が来る（3・三八二 雑歌 丹比国人）

a～fは、名詞につづく助詞の「を」によって見る対象が明示され、

その対象を「く」と見る」と詠む。「と」に上接する語は、a・bのように用言である場合と、c・fのように体言である場合とがある。当該歌において、見る対象は「菟原処女の奥つき」という場所であり、そこを「行き来」と見るのが詠まれる。助詞の「と」に上接することは「行き来」という力行変格活用動詞の終止形であり、当該歌は特にa・bに類似すると言える。

aは、天智天皇が危篤に陥った際の大后の歌で、「木幡の上」という場所を「通ふ」と見る。助詞の「と」に上接するのは、「通ふ」という力行四段活用動詞の終止形である。誰が「通ふ」という行動をするのかは歌に明示されないが、「直に逢はぬかも」とあることからすれば、「通ふ」のは、生身の天皇ではないと考えられ、天皇の靈魂とも面影とも考え得る。助詞「と」は「終止法の句をうけてくとしてくとしてくと思つての意」をもつとされる（『上代編』）。aは、大后の心情からは現実としては見えない天皇が木幡の上を通うお姿が見える意と考えられる。

bは、柿本人麻呂による「石見相聞歌」であり、「角の浦廻を」「浦なしと」「渇なしと」人が見ると詠む。「と」に上接するのは「なし」という形容詞の終止形である。この表現について、平館英子氏は「繰り返しの否定によって石見の海岸に住む貧しさを強調すると考えられるが、海の景の美しさを否定しているわけではない」とし、「石見国が海側に開かれてゆく生活の方法を持たないこと、その結果海側から風や波が寄せて来る勝景の地であることを意味している」と述べている⁽⁸⁾。ここには石見の海岸という対象に対する把握が目に映る勝景の地という把握以外に生活者の視座からの心情に基づく貧しさという把握のあることが知られる。bにおける助詞「と」

もまた、aの用法に準じると考えられる。

a・bの用例からは「くを…と見る」は、思つて見る意、すなわち見る側の意図が反映する見方のあることが理解できる。このことは、助詞「と」に上接することは体言であるc・fにも共通する。cは、大来皇女の作歌であり、弟の大津皇子が埋葬された山を弟と思つて見て偲ぶことを詠む。dは、人々が「我」を「海人」と思つて見ることを詠み、eは、多くともされている火を「野火」と思つて見ることで、fは、「時じき時」つまり国見に良い時期ではない時だと思つて見ないままにしまったら後悔するだろうことを詠む。a・fに挙げた「くを…と見る」という形式によって詠まれる歌はいずれも「を」が受ける対象の実体を見るのではなく、そこに見る側の意図が想像・推測を含んで反映していると解し得る。とすれば、当該歌の「奥つきを行き来と見れば」の「行き来」は実体を持つ行為そのものとは限らない。

「奥つき」について、村田正博氏は、「オク・ツ・キ」という語構成から「ふかい土中の一郭、つまり死者を安置するために土中にしつらえられた一郭をさすものと認められる」とし、「意味の拡大の結果、土中の一郭を含む墓全体をさすにいたつたものと考えられる」；だが、その本来の意味のゆえに、意味を拡大した際にも、死者を安置する「郭をつよく意識していることはいうまでもない」と指摘している⁽⁹⁾。当該歌と同様高橋虫麻呂集中の歌である一八〇七番歌には、「…波の音の 騒く港の 奥つ城に 妹が臥やせる…」と詠まれ、「奥つき」が死者の横たわる場所として描かれている。当該歌群において、長歌および反歌第二首には「墓」と詠まれるのに対し、当該歌のみ、「奥つき」と詠まれるのは、そこに、処女が存在

を意識する故であろうと推測される。歌中の主体「我」は、死後、処女の横たわる場所を誰かが行き来していると思つて「奥つき」を見るのである。「奥つき」に横たわる処女のもとを「行き来」ことが可能なのは、夢で菟原処女の死を知り処女を追つて行つた千沼壮士に他ならない。

長歌末尾において、「新喪のごとも 音泣きつるかも」と、再生儀礼を想起させる泣き方で感慨を詠んだことを受けて、短歌第一首は、想像の中に、死後も菟原処女の「奥つき」へと通う千沼壮士を再生していると考えられるのである。「我」は、千沼壮士が菟原処女墓へと通うと思つて見ると「音のみし泣かゆ」と詠み、そこに深い感慨を託している。

反歌第二首では、菟原処女との関係性が不明な墓上の木を詠み、その木の枝のなびく様に「聞きしごと千沼壮士にし依りにけらし」と菟原処女から千沼壮士への愛情を読み取っている。反歌第二首は、反歌第一首において泣いたことを受けて、墓上の木の枝が処女の心情の顯れとして見え、想像の中に処女が再生されていると読み取ることができる。

五 おわりに

当該歌群の感慨は、他の多くの挽歌とは異なり、「故縁」に託して詠まれる。「故縁」において語られる妻争いの有り様そのままに眼前にある墓は、悲劇的になくなった三者を想起させる。「我」は、伝聞した「故縁」において語られた三人の死を悲劇譚として把握し、長歌末尾において再生儀礼の記憶を想起させる。それを受けて反歌第一首では、死後、菟原処女の墓に通う千沼壮士を想像の中に再生

し、再び哭泣を詠む。反歌第一首での哭泣を受け、反歌第二首では、木の枝を菟原処女の情感の顯れとして見て、想像の中に処女の情感を再生しているのである。当該歌の感慨の表現は、遠く再生儀礼の記憶を有し、他の挽歌にも用いられる「音：泣く」という表現を用いて、死者を想像の中に再生してゆく方法をもつと言えよう。その方法をもつて再生するのが、相思相愛の千沼壮士と菟原処女であることは、この譚の事情に関心を寄せた「我」の感動が、相思相愛でありながら結ばれずに亡くなった二者への哀惜に片寄りを持つことを窺わせる。

当該歌群には、伝聞した「故縁」を悲劇譚として把握し、その把握に基づいて自らの想像の中に死者を再生し、歌に表現するという他の多くの挽歌には見られない方法が見られる。ここに「我」が把握した「故縁」を歌によって伝えるという、伝説歌とも言い得る方法を見出すことができると考えられる。

注(1)『時代別国語大辞典 上代編』三省堂、昭和四二年一二月。以下「上代編」と略記する。

(2)『新編日本古典文学全集 萬葉集』①小島憲之氏・木下正俊氏・東野治之氏校注・訳、小学館、平成六年五月

(3)和田萃氏『日本の古代の儀礼と祭祀・信仰』上、塙書房、平成七年三月

(4)内田賢徳氏「卷十六桜児・縋児の歌」主題と方法」『萬葉集研究』二十、平成六年六月

(5)芳賀紀雄氏「歌の由縁ということ―萬葉集卷十六の「有由縁并雜歌」―」『説話論集』六、清文堂出版、平成九年四月

(6) (4)に同じ。

(7) 吉井巖氏「倭太后の歌一首について」『萬葉』一三一、平成元年三月

(8) 平館英子氏「石見相聞歌―放り行く人・その心―」『萬葉悲別歌の意匠』

塙書房、平成二七年三月（初出『萬葉集研究』三一、塙書房、平成二二年二月）

(9) 村田正博氏「『おくつき』考」『山辺道』二五、昭和五六年三月

受贈雑誌(三)

高知大国文

高知大学人文学部国語国文学研究室

稿本近代文学

筑波大学国語国文学会

語学文学

北海道教育大学語学文学会

國學院雑誌

國學院大學

国語学研究

東北大学文学部国語学刊行会

国語国文学研究

熊本大学文学部国語国文学会

国語国文学会誌

新潟大学人文学部日本文化学科

国語国文学報

愛知教育大学国語国文学研究室

國語國文研究

北海道大学国文学会

国語国文論集

安田女子大学日本文学科

国語と教育

長崎大学国語国文学会

国際日本文学研究集会会議録

国文学研究資料館

国文学

関西大学国文学会

国文学研究

早稲田大学国文学会

国文学研究資料館紀要

国文学研究資料館

国文学研究ノート

神戸大学研究ノートの会

国文学攷

広島大学国語国文学会

国文学試論

大正大学大学院文学研究科

国文学踏査

大正大学国文学会

国文学論考

都留文科大学国語国文学会